

福岡市埋蔵文化財調査報告書第873集

那珂君休遺跡VIII

—那珂君休遺跡群第9次調査報告—

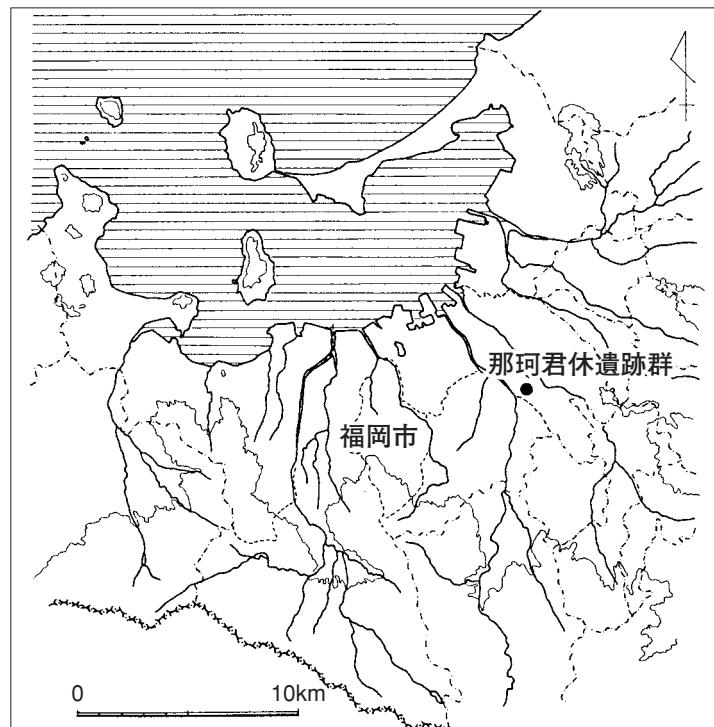
2006

福岡市教育委員会

NA KA KUN RYU
那珂君休遺跡Ⅷ

—那珂君休遺跡群第9次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第873集



遺跡略号 NKR-9
遺跡調査番号 0487

2006

福岡市教育委員会

序

福岡市博多区は、弥生時代『奴国』の中心地域と推定され、国史跡板付遺跡を初めとして、数多くの重要な遺跡が存在しています。またこの地域は、住宅地として開発が進んでいる地域であり、これに伴って数多くの発掘調査も行われています。

本書は、共同住宅建設に先立って、平成16年度に実施した那珂君休遺跡群第9次発掘調査の成果を報告するものであり、調査では弥生時代から古墳時代と考えられる水田跡や溝などを発見するなどの成果を上げました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとするご協力を賜りました中村建設株式会社をはじめ、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成18年10月13日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成16年（2004）度に福岡市博多区那珂4丁目240番で、費用を原因者負担で実施した那珂君休遺跡群第9次地点の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は山崎龍雄が担当した。
- (3) 遺構実測は山崎龍雄が主体となって行い、上方高弘、平ノ内武、平山景将、藤野雅基の協力を得た。また遺物の実測は山崎、境聰子が行った。
- (4) 本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。
- (5) 遺構の撮影は山崎が行い、出土遺物の撮影は上方が行った。
- (6) 本書に使用した方位は磁北であり、真北とは $6^{\circ}18'$ 西偏する。
- (7) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (8) 本書の執筆・編集は山崎が行った。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	2
1 遺跡の立地と歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の記録	6
1 調査の概要	6
2 遺構と遺物	6
1) 第1面の調査	6
① 溝状遺構	6
② 水田遺構	23
③ その他の遺構	24
2) 第2面の調査	26
① 溝状遺構	26
② 堀状遺構	28
3) まとめ	29

挿図目次

第1図 那珂君体遺跡群と周辺の遺跡 (1/25,000)	3
第2図 那珂君体遺跡群調査地点位置図 (1/8,000)	4
第3図 第1面遺構全体図 (1/200)	7
第4図 I区南壁・西壁土層 (1/60)	9
第5図 II区北壁土層、I・II区下層東西土層 (1/60)	10
第6図 I区第2面検出状況 (1/150)	11
第7図 SD01土層 (1/60)	14
第8図 SD01出土遺物 (1/3・2/3)	16
第9図 SD01出土遺物 (1/6)	17
第10図 SD01内SX08出土状況 (1/30)	19
第11図 SD04土層 (1/60)	19
第12図 水口SX09 (1/40)	22
第13図 SX11・16 (1/60)	24
第14図 SX16出土矢板 (1/6)	27
第15図 堀SX14 (1/30)	29
第16図 那珂君体遺跡群遺構配置図 (1/4,000)	30

写真目次

写真1 調査区を南から見る	2
写真2 現場作業風景	5
写真3 調査区全景（上から）	6
写真4 I区全景	8
写真5 II区全景	8
写真6 I区西側の状況	12
写真7 I区東側の状況	12
写真8 I区SD01（南東から）	13
写真9 SD01完掘状況（南東から）	13
写真10 SD01土層状況	15
写真11 SD01南壁土層状況（北西から）	15
写真12 SD01木器出土状況	15
写真13 SD01木器出土状況	15
写真14 各遺構出土遺物	18
写真15 SD01西壁中で検出したSX08	19
写真16 I区SD04検出状況（南東から）	21
写真17 II区SD04検出状況（南東から）	21
写真18 II区水田面SS13検出状況	22
写真19 水口SX09の状況	23
写真20 SX11検出状況（北から）	25
写真21 SX16検出状況（北から）	25
写真22 II区北壁段落ち部土層状況	26
写真23 II区北壁東側土層の状況	26
写真24 I区第2面目段落ちの状況	27
写真25 SD05（西から）	27
写真26 2面検出のSD07検出状況	28
写真27 SD07、SX14・15検出状況（南から）	28

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成16（2004）年12月7日に中村建設株式会社より、福岡市博多区那珂4丁目240番における共同住宅建設の為の埋蔵文化財事前審査願い（受付番号16-2-850）が福岡市教育委員会に提出された。申請地には平成15年12月22日（受付番号15-2-903）に一度申請がなされていたが、再度中村建設株式会社から提出されたものであった。申請された場所は那珂君休遺跡群のほぼ中央部に位置していたため、平成16年1月26日に試掘調査を行い、遺構を検出した。開発に先立っては埋蔵文化財の記録保存が必要であるとして、中村建設株式会社と協議を行い、発掘調査費用や条件整備を申請者側に負担していただくということで、建物建設予定地部分を対象に調査を実施することとなった。

調査は平成17年2月10日から開始し、3月31日迄行った。調査実施面積は申請面積1,554m²中の700m²である。また報告書作成作業は平成18年度に実施した。

調査にあたっては、申請者の中村建設株式会社をはじめとして、工事関係の方々に協力を受けた、記して感謝の意を表します。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託	中村建設株式会社	代表取締役	山下 隆吉
調査主体	福岡市教育委員会教育委員会		
調査総括	文化財部埋蔵文化財第1課長（当時埋蔵文化財課長）	山口 謙治	
事務担当	（調査時）埋蔵文化財課調査第2係長 池崎 謙二 （整理時）埋蔵文化財第1課調査係長 山崎 龍雄		
	文化財管理課管理係（当時整備課） 御手洗 清（旧） 鈴木 由貴（現）		
調査担当	埋蔵文化財課主任文化財主事（埋蔵文化財第1課調査係長） 山崎 龍雄		
調査作業	伊藤美和子、井上 一雄、井上 利弘、井上 英子、岩崎 良隆、岩本三重子、牛尾 成正、大橋 善平、岡部 安正、尾崎 裕光、越智 信孝、亀井 宮子、北原由紀子、貴田 潔、栗野 孝子、佐藤アイ子、末次 亮、杉村 文子、澄川アキヨ、堤 篤史、堤 正子、土斐崎初栄、永井 鈴子、中島 道夫、中村サツエ、中村フミ子、西川シズ子、波賀 久雄、原 幸子、藤野トシ子、藤野 幾志、藤野 雅基、別府 俊美、宮崎 幸子、山下 嘉人、脇坂レイコ		
整理作業	境 聰子、増永 好美		

那珂君休遺跡群第9次調査の概要

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
NKR-9	0487	福岡市博多区那珂4丁目240番	1,554.0m ²	700.0m ²	共同住宅	2005.2.10~3.31	山崎龍雄

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境（第1・2図、写真1）

福岡平野は、西は背振山塊から派生する長垂丘陵、東は犬鳴・三郡山地に囲まれた地域で、南北に貫流して博多湾に注ぐ室見川・樋井川、那珂川・御笠川、宇美川・須恵川・多々良川などの中小河川の沖積作用によって形成された沖積平野と、油山北部台地・鴻巣丘陵や、諸岡台地、糟屋台地などの丘陵・台地部とによって形成された平野である。この平野はまた地形的に西から早良平野、福岡平野、糟屋平野に細分され、ここで言う狭義の福岡平野は那珂川と御笠川、月隈丘陵に囲まれた部分を指す。

那珂君休遺跡群はこの福岡平野の北側、諸岡川と御笠川に挟まれた沖積地上に立地する。那珂君休遺跡群の南側には春日市から延びる低位段丘上に立地する板付遺跡があり、板付遺跡台地部の両側には水田遺構が展開するが、那珂君休遺跡群はこの水田面に繋がる遺跡である。那珂君休遺跡群の西側台地部には那珂遺跡群、東側福岡空港内の沖積地上には雀居遺跡、下月隈C遺跡や立花寺遺跡、北側沖積地には東那珂遺跡などが立地している。

那珂君休遺跡群の調査は、那珂深オサ遺跡（第1～3次）の調査まで含めれば、12次に亘る調査が行われている。いずれの調査でも溝や水利施設の堰、水田遺構などが検出されており、この遺跡が水田を中心とする生産遺跡であることが分かる。遺跡で検出した水田の時期は弥生時代から中世迄である。特筆されるものとして、古代の条里に伴う溝が確認されており、また大宰府からの官道もこの遺跡内を通ることが推定されている。この遺跡の西側に立地する那珂遺跡群では、平成18年8月現在、第114次調査迄行われている。那珂遺跡群は旧石器時代から中世にかけての各時期の遺構が確認されている集落遺跡である。

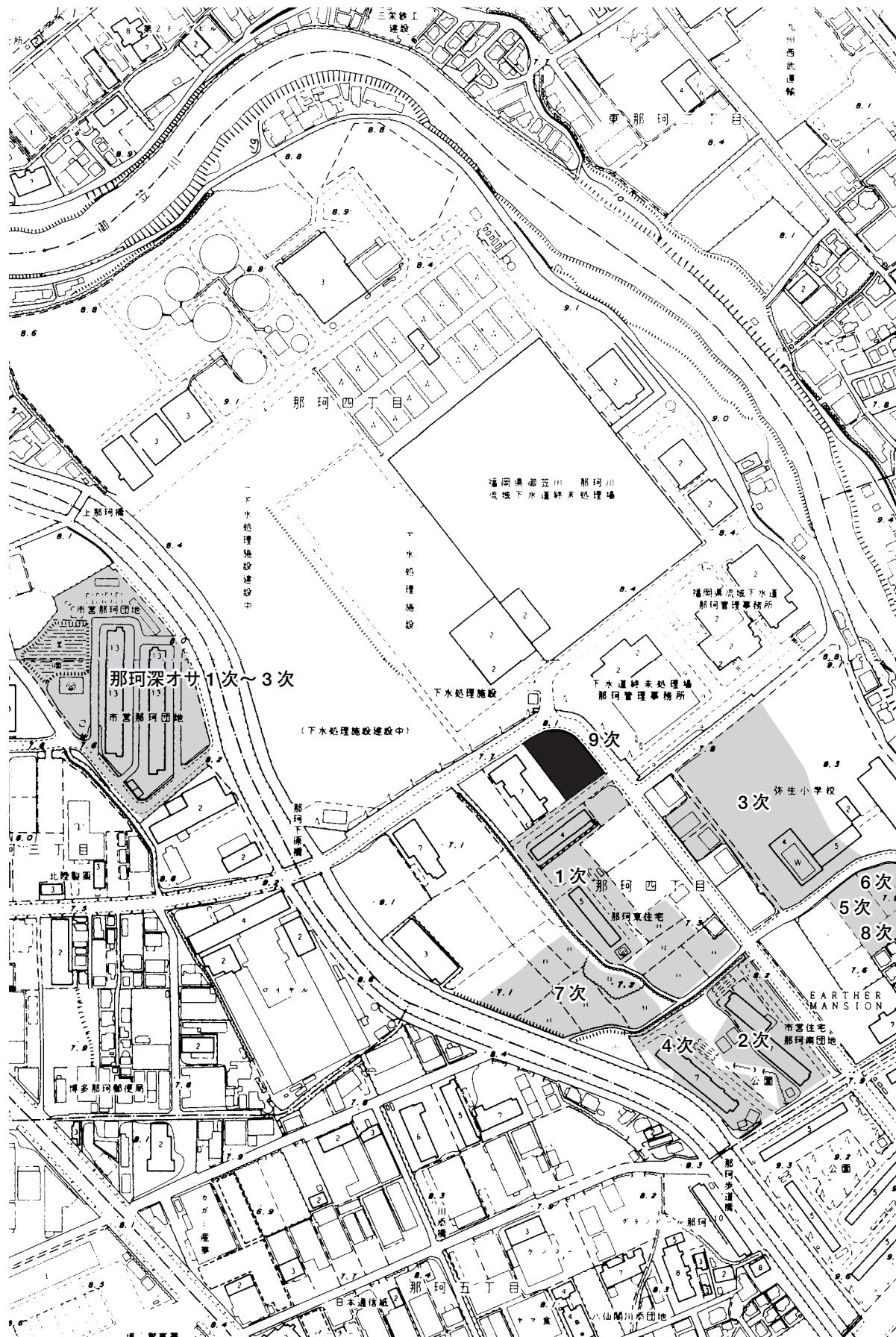


写真1 調査区を南から見る



- | | | | |
|------------|--------------------|-------------|-------------|
| 1. 博多遺跡群 | 7. 那珂遺跡群 | 13. 井尻遺跡 | 19. 赤井手遺跡 |
| 2. 堅粕遺跡 | 8. 那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡群 | 14. 曰佐遺跡群 | 20. 三宅庵寺 |
| 3. 吉塚本町遺跡群 | 9. 板付遺跡 | 15. 須玖唐梨遺跡群 | 21. 野多目遺跡 |
| 4. 箱崎遺跡 | 10. 諸岡遺跡 | 16. 須玖永田遺跡 | 22. 野多目拈渡遺跡 |
| 5. 吉塚遺跡群 | 11. 雀居遺跡 | 17. 須玖岡本遺跡 | 23. 仲島遺跡 |
| 6. 比恵遺跡群 | 12. 五十川遺跡 | 18. 須玖四丁目遺跡 | 24. 麦野A遺跡 |

第1図 那珂君休遺跡群と周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 那珂君休遺跡群調査地点位置図 (1/8,000)

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要（第3～6図、写真2）

本調査区は那珂君休遺跡群の中央部に位置し、標高は現況で約7mを測る。調査区南側の君休第1次調査ではトレンチを中心とした部分的な調査ではあるが、ピットや土坑、福岡平野の条里方向にそう溝が検出されている。今回の調査は、試掘調査で水田面を上下2面検出していたが、調査時期が年度末にかかり、調査期間が限られていたため、下層水田に対象をしぼって調査を実施した。調査範囲は建物予定部分であるが、排土が場内処理の為、二分割して南側をI区、北側をII区と調査区を設定した。調査は平成17年2月10日の重機による表土除去から開始し、3月31日の埋め戻し、機材撤収をもって調査を終了した。

調査区の基本土層はI区南壁では以下のとおりである。地表より、表土・現代水田耕土-0.4～0.5m、-0.7～0.8m（標高6.6～6.7m）が上層水田面（中世～近世か）で、この面で酸化鉄分が多く沈着し、上面には所々砂質土が被る。-1.1～-1.2m（標高6.1～6.2m）が下層水田面となり、この面の上には粗砂混じりのシルトや細砂層が0.2m程堆積していた。この面が調査対象面となる。以下0.1～0.3m厚で黒褐色粘質土となり、-1.3mで基盤面の灰褐色粘質土となる。

調査は前述したが、期間の都合上、下層水田面にしぼって行った。この面で検出した遺構は溝2条、水田遺構であるが、この面が基盤面でなく、I区周壁に設定していたトレンチを兼ねた排水溝で下層基盤面に掘り込む黒色粘土の遺構を確認した為、期間の許す範囲で大溝SD01東側と南西側を基盤面迄人力と重機で下げて確認調査を行った。この確認調査でSD01の東側が段落ちし谷部になることが確認出来た。



写真2 現場作業風景

2. 遺構と遺物

1) 第1面の調査（第5・6図、写真3～5）

第1面で検出した遺構は水路と思われる大溝1条、この溝の両側には土堤状の高まりを持ち、両側には水田が展開するが、水田の区画は確認出来なかった。

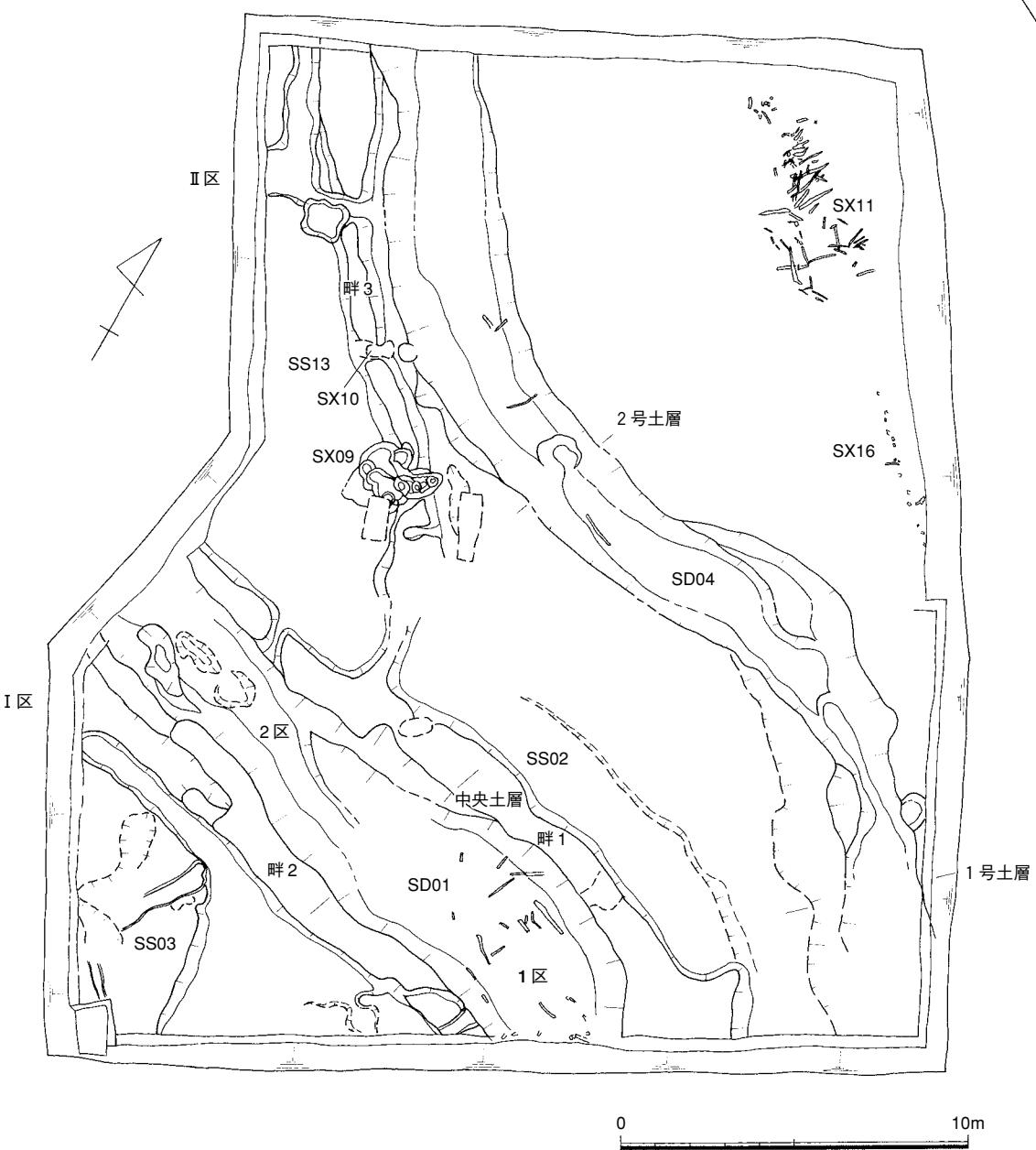
① 溝状遺構（SD）

SD01（第6・7、写真6・8～11）

I区で略東西方向に流れる大溝である。確認規模は19m、幅は3～5.3m、深さは南北壁面で最大1～1.2m、中央ベルトで0.8mを測る。溝幅に差があるのは、堆積状況から3回の大きな水の流れがあり、それらを含めた最大幅によるものである。第1期（最新期）の流れは第1水田面からのもので、残りの良い南壁によれば幅2m弱、深さは0.7m程である。第2期は第2水田面で浅い逆台形を呈す。この溝の両側には幅1m、高さ0.2m程の土堤状の高まりを持つ（畔1・2）。土堤の両側には水田が広がり、水田に水を供給する水口がある。又洪水などで流されたらしく土堤は消失している部分もある。第3期は基盤面からの溝で断面は丸みを持った逆台形を呈す。幅は4m程を測る。埋土は細砂や粗砂、粘質土、シルトなどが薄く層状に堆積し、流木などを少量含むが、土器類や木器などは余り出土しなかった。第1期溝は出土遺物がなく、時期については不明であるが、断面で見る限り第2期・3期の溝に比べてかなり新しい時期と思われる。第2期・3期溝は数少ない遺物などから弥生時代中期から後期位であろうか。弥生前期の土器も僅かに含んでおり、周辺に該期の遺構が存在する可能性がある。



写真3 調査区全景（上から）



第3図 第1面遺構全体図 (1/200)

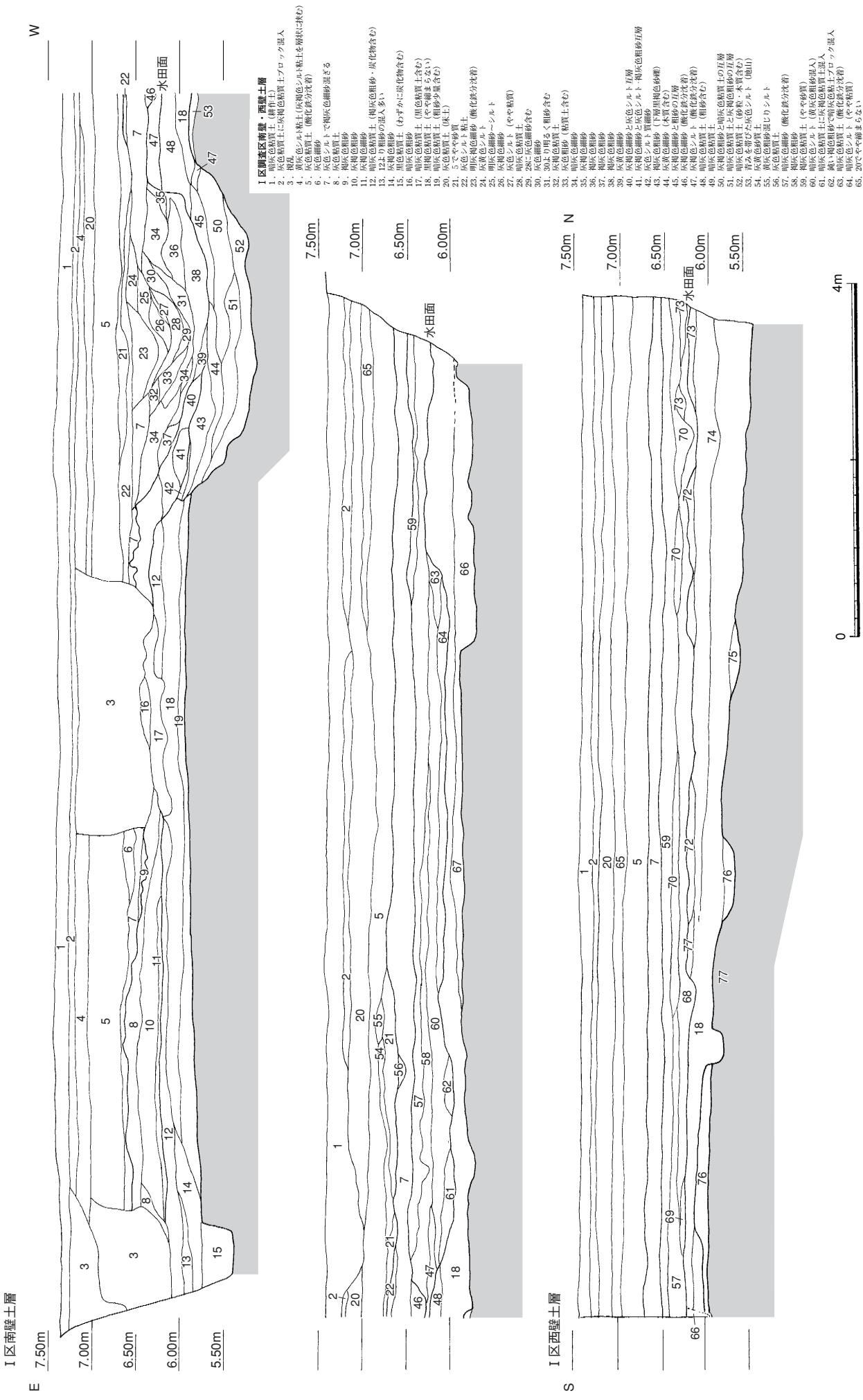


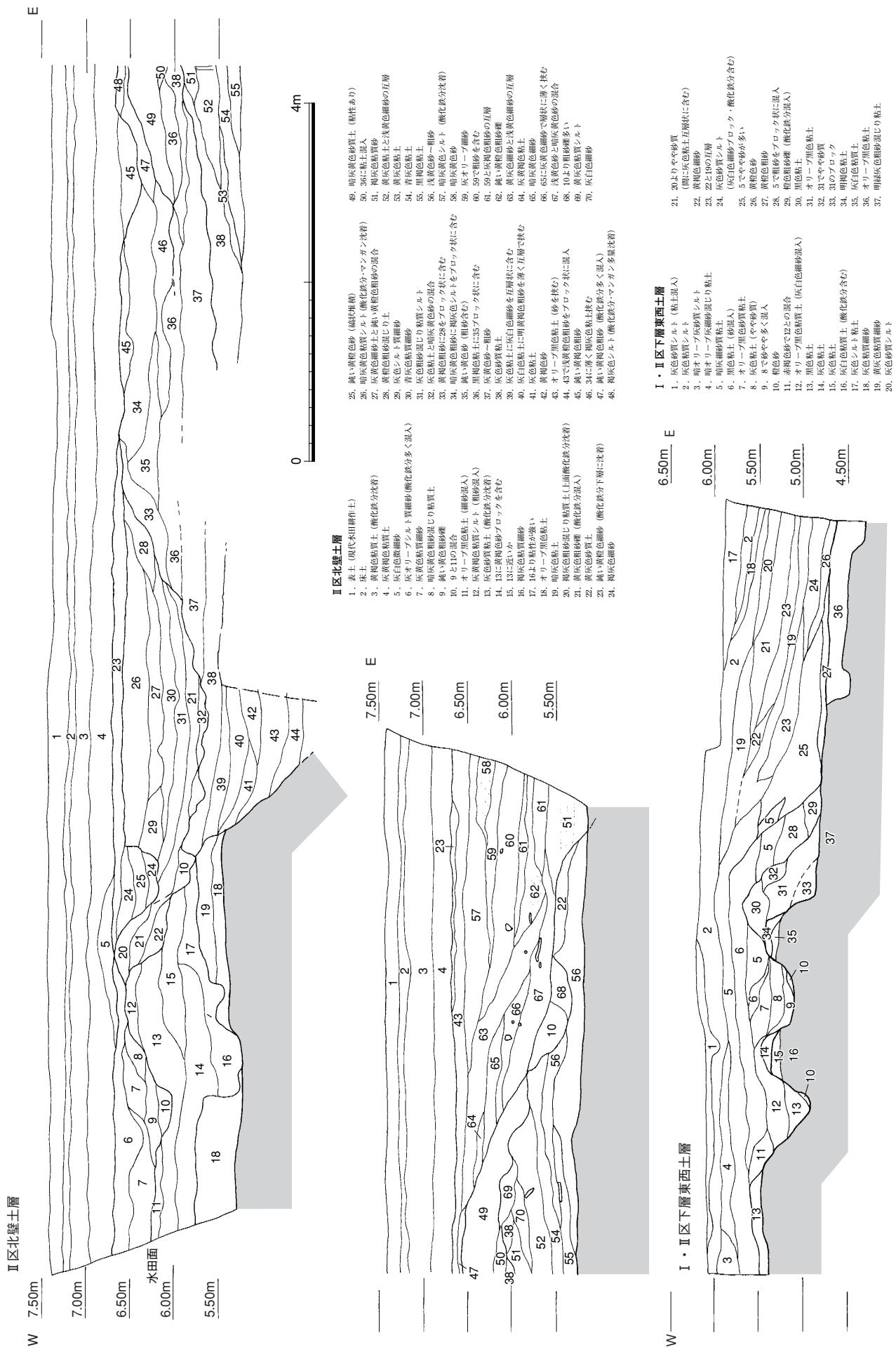
写真4 I区全景



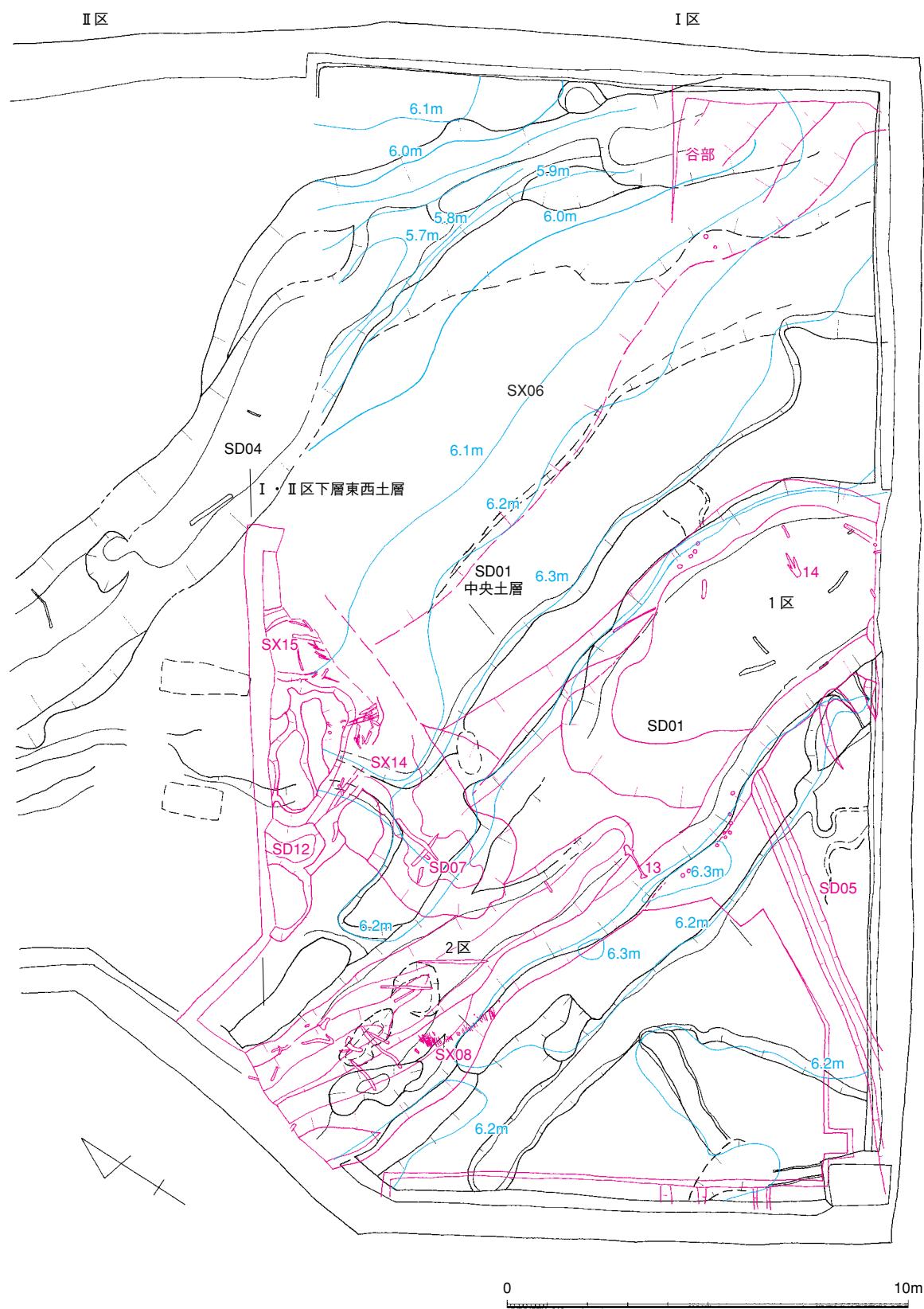
写真5 II区全景

第4図 I区南壁・西壁土層(1/60)





第5図 II区北壁土層、I・II区下層東西土層 (1/60)



第6図 I区第2面検出状況 (1/150) (赤は第2面遺構)



写真6 I区西側の状況



写真7 I区東側の状況

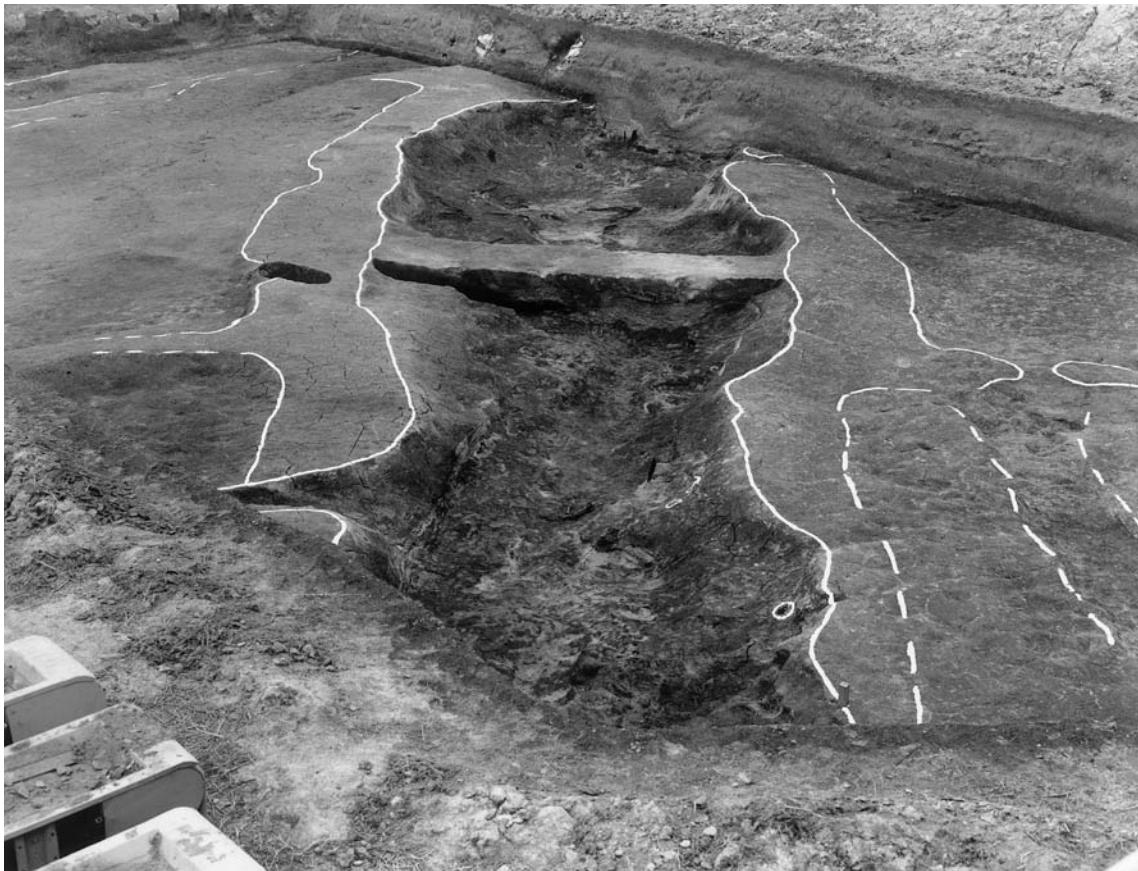
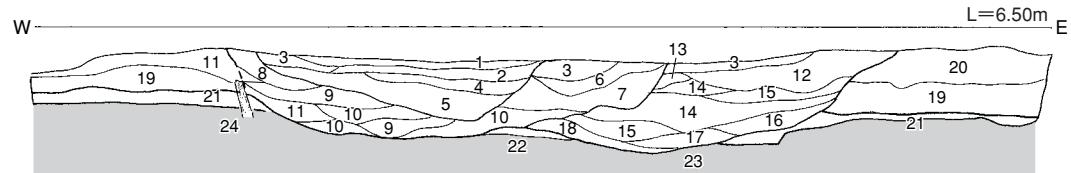


写真8 I区SD01（南東から）



写真9 SD01完掘状況（南東から）

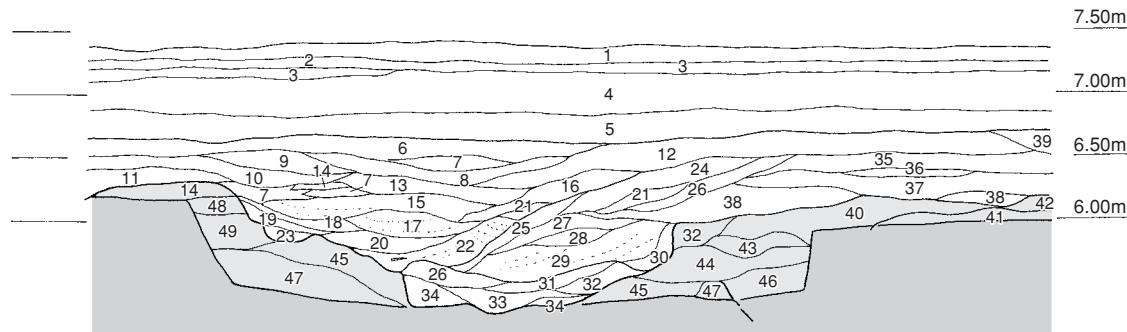
SD01中央土層



SD01中央土層名稱

- | | | |
|------------------------|--------------------------|-----------------------|
| 1. 黄灰色細砂 (灰白色粗砂を縞状に挟む) | 9. オリーブ黒色粘土と暗褐色粗砂の混合 | 17. 黑褐色粘質砂と鈍い黄褐色砂の混合 |
| 2. 灰黄褐色粗砂 | 10. 暗褐色粗砂にオリーブ黒色粘土混入 | 18. 鈍い黄褐色砂に薄く灰褐色砂を挟む |
| 3. 灰黄褐色粗砂 (2より粒子が細かい) | 11. オリーブ黒色シルト粘土で褐色粒子多く含む | 19. 漆黒の白色粘土 |
| 4. 灰黄褐色細砂 | 12. 黑色粘土 (やや砂質) | 20. 暗黃灰色粘土 (上面酸化鉄分沈着) |
| 5. 灰白色粗砂疊 (間に酸化鉄分層を含む) | 13. 黄灰色細砂 | 21. オリーブ黄色シルト粘土 |
| 6. 灰オリーブ細砂 | 14. オリーブ黒色粘土と灰黄色砂の互層 | 22. 灰黄褐色粗砂 |
| 7. 灰黄色粗砂疊 | 15. オリーブ黒色粘土 (植物、粗砂を含む) | 23. 灰オリーブ粘質粗砂 |
| 8. オリーブ黒色シルト粘土 | 16. 14より鉄分多く含む | 24. オリーブ灰粘土 |

北西壁土層



I・II区北壁SD01土層名稱

- | | | | |
|-------------------------|------------------------|--------------------------|-------------------------|
| 1. 暗灰色粘質土 (現代耕作土) | 14. 暗灰黄色砂 | 26. 黑褐色粘土 (酸化鉄分・流木含む) | 39. 暗灰黄色シルト |
| 2. 灰色粘質土 | 15. 灰白色粗砂疊 | 27. 明黄褐色粗砂疊 | 40. 暗灰黄色砂と灰黑色粘土ブロック |
| 3. 黄灰色シルト・灰褐色シルトの混合 | (酸化鉄分含み、互層で水平に堆積) | 28. 黄灰色細砂 (流木含む) | 41. 暗灰色砂質粘土 |
| 4. 3で継まりが強い | 16. 黄灰色粗砂混じりシルト | 29. 明黄褐色粗砂疊 | 42. 41に35をブロック状に含む |
| 5. 灰色粘質土 (酸化鉄・マンガ粒子が多い) | 17. 黄灰色細砂 | 30. 29に26ブロックを含む | 43. 黄灰色粘質細砂 |
| 6. 灰色シルトで褐灰色粗砂混入 | 18. 暗灰黄色粘質砂 | 31. 黄灰色細砂と浅黄色粗砂の互層 | 44. 黄灰色砂質粘土 |
| 7. 灰黄色細砂 | 19. 灰黄色細砂 | 32. 26に暗灰黄色粗砂疊と互層状に挟む | 45. オリーブ黒色粘土 |
| 8. 灰色砂質粘土 | 20. 灰褐色粗砂疊 | 33. 黑褐色砂質粘土に褐色砂ブロック混入 | 46. 44と45の混合 |
| 9. 褐灰色粗砂混じりシルト (酸化鉄分沈着) | 21. 灰黄色粗砂疊 | 34. オリーブ黒色粘土で褐色砂ブロック状に混入 | 47. 黒色粘土 |
| 10. 褐灰色粘質土 (やや砂質) | 22. 灰白色中粒砂 | 35. 暗灰黄色粗砂疊 | 48. 黑褐色粗砂混じり粘土 |
| 11. 灰黄色粗砂疊 (酸化鉄分含む) | 23. 灰黄色細砂とオリーブ黒色粘土 | 36. 黄褐色細砂 | 49. 暗灰黄色砂質粘土 (酸化鉄分多く含む) |
| 12. 灰黄褐色粗砂混じり砂 | 24. 褐灰色粗砂 | 37. 暗灰黄色砂 (酸化鉄分含む) | |
| 13. 灰黄色粗砂 | 25. 黄灰色細砂で下部灰色粘土ブロック混入 | 38. 灰オリーブ砂 (灰色粘土少量含む) | |

0 3m

第7図 SD01土層 (1/60)

SX08 (第10図、写真15) は西岸際の土堤を堀下げた際に検出したものである。最大35cm程、径2～3cmの先を尖らせた丸い杭材を、長さ2mの範囲で溝に倒れこむように確認された。これらを受ける横木などではなく、また木材の上面の堆積土は灰混じり粘土で、遺物などは含まない。この部分の土堤が崩れ、それを補修するために打ち込まれたのか、下敷の基礎として埋め込まれたものと考える。

出土遺物 (第8・9図、写真12～14) 弥生前期から中期にかけての土器や農耕具を中心とする木製品が少量出土している。出土量としては少なく、土器も摩滅が進んだ細片である。

1・2は1区上層出土。口縁が外反して水平に短く延びる無頸壺の口縁から胴部片。1は1/12程の細片で、復元口径は13.6cmを測る。表面はやや摩滅するが、調整は外面タテハケメ、内面から口縁はナデである。胎土には1mm内の石英・長石細粒を含み、焼成は良好、色調は鈍い黄橙色を呈す。2は1/8片で、復元口径16.6cmを測る。調整はナデであるが、外面には丹塗り痕跡が残る。口縁部に

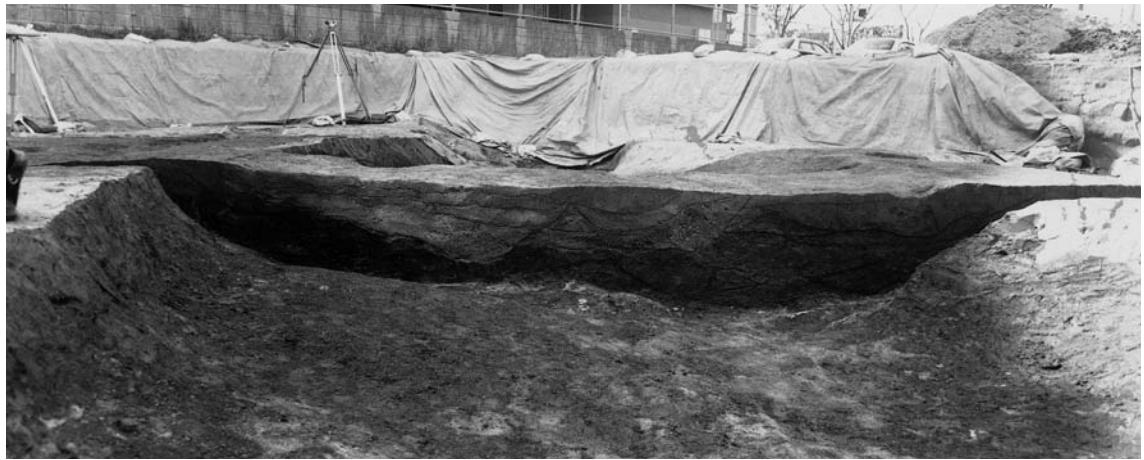


写真10 SD01土層状況

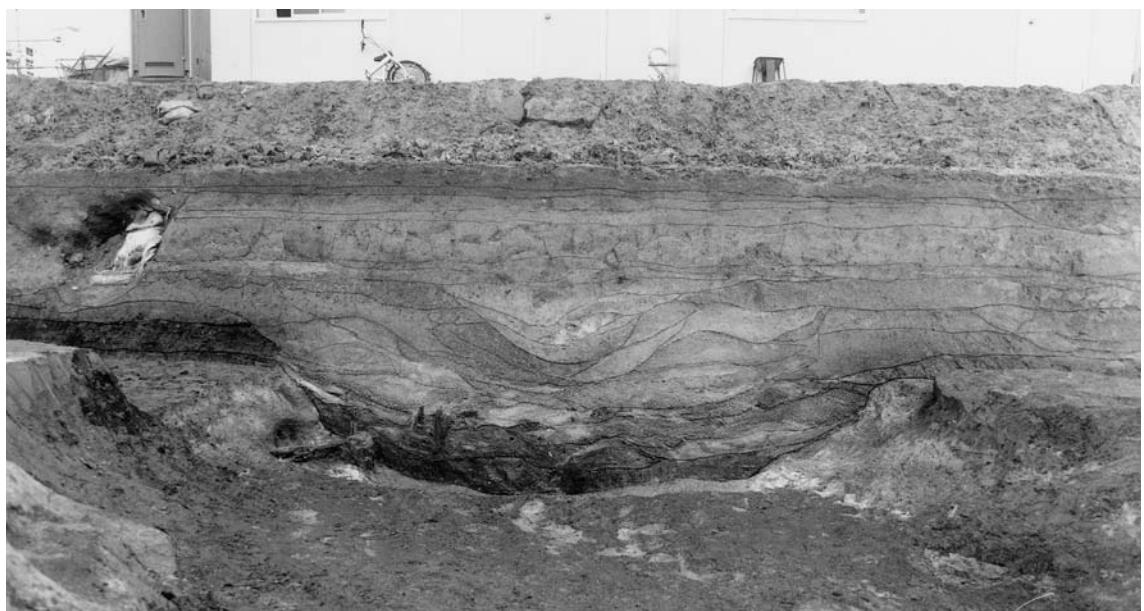


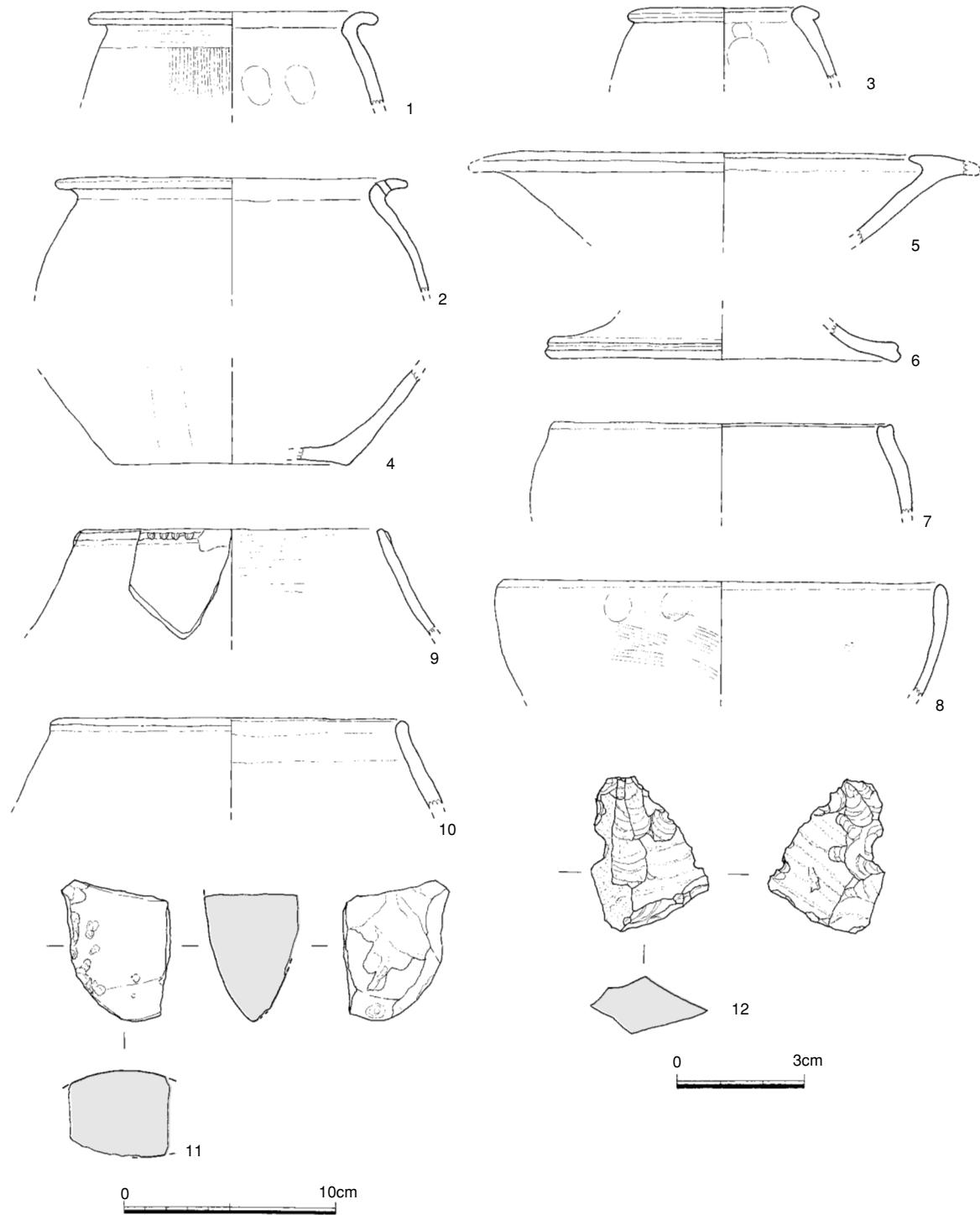
写真11 SD01南壁土層状況（北西から）



写真12 SD01木器出土状況

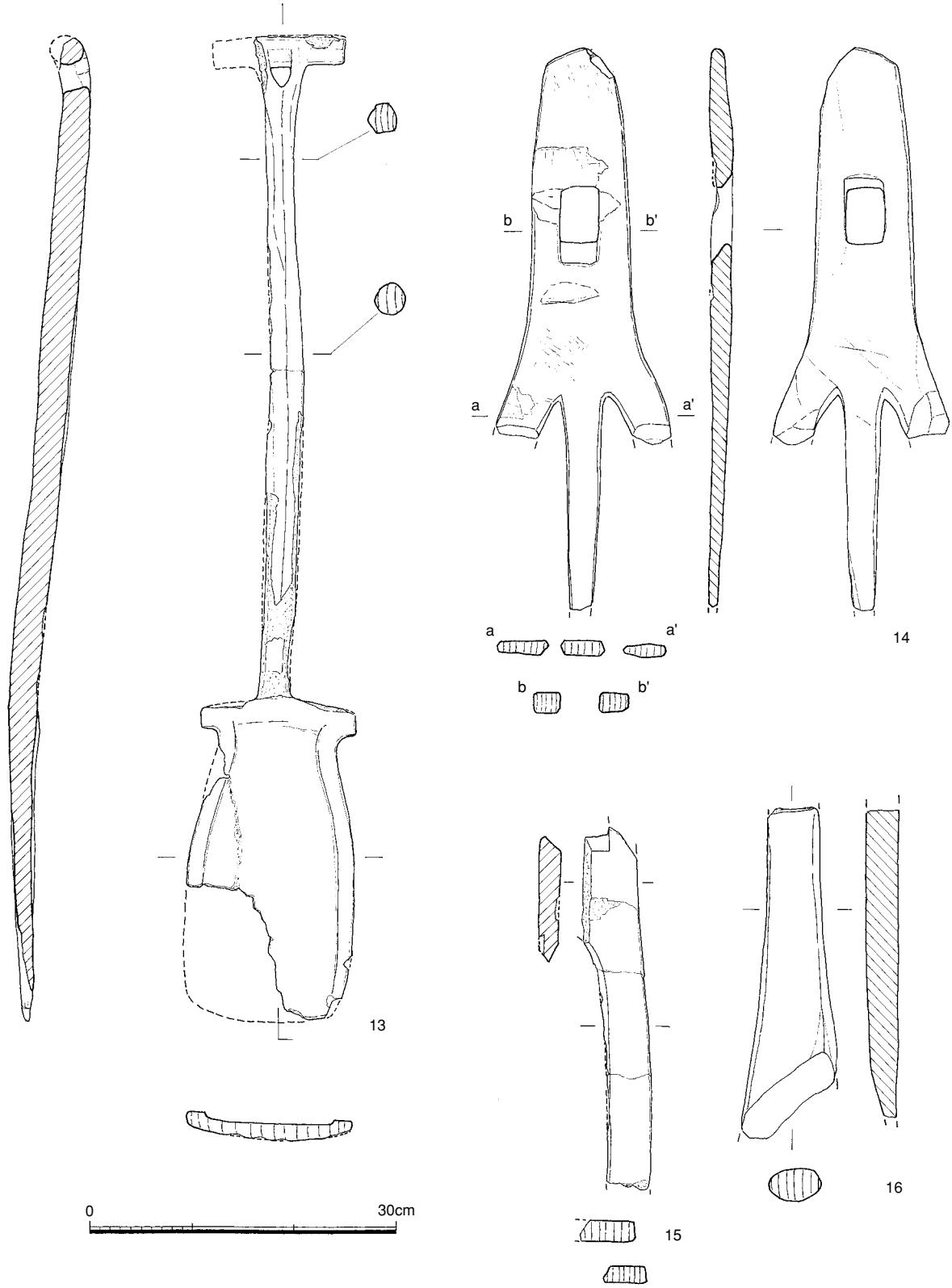


写真13 SD01木器出土状況



第8図 SD01出土遺物（1/3・2/3）

は直径0.3cmの円孔が1ヶ所残るが、焼成前の穿孔である。胎土は精良であるが、金雲母片、2mm大の赤色粒子や白色粒子を少量含む。焼成は良好、色調は鈍い黄橙色を呈す。3は2区下層出土の短頸壺口縁部1/4片で、復元口径9.0cmを測る。摩滅がひどく調整は不明であるが、内面指押さえ痕が残る。胎土は2mm内砂粒を含み、焼成は普通、色調は鈍い黄橙色を呈す。4は1区出土の壺か甕の底部か。1/7片で底部はやや上底。復元底径11.0cmを測る。表面は摩滅するが、外面タテ粗いハケメ



第9図 SD01出土遺物 (1/6)

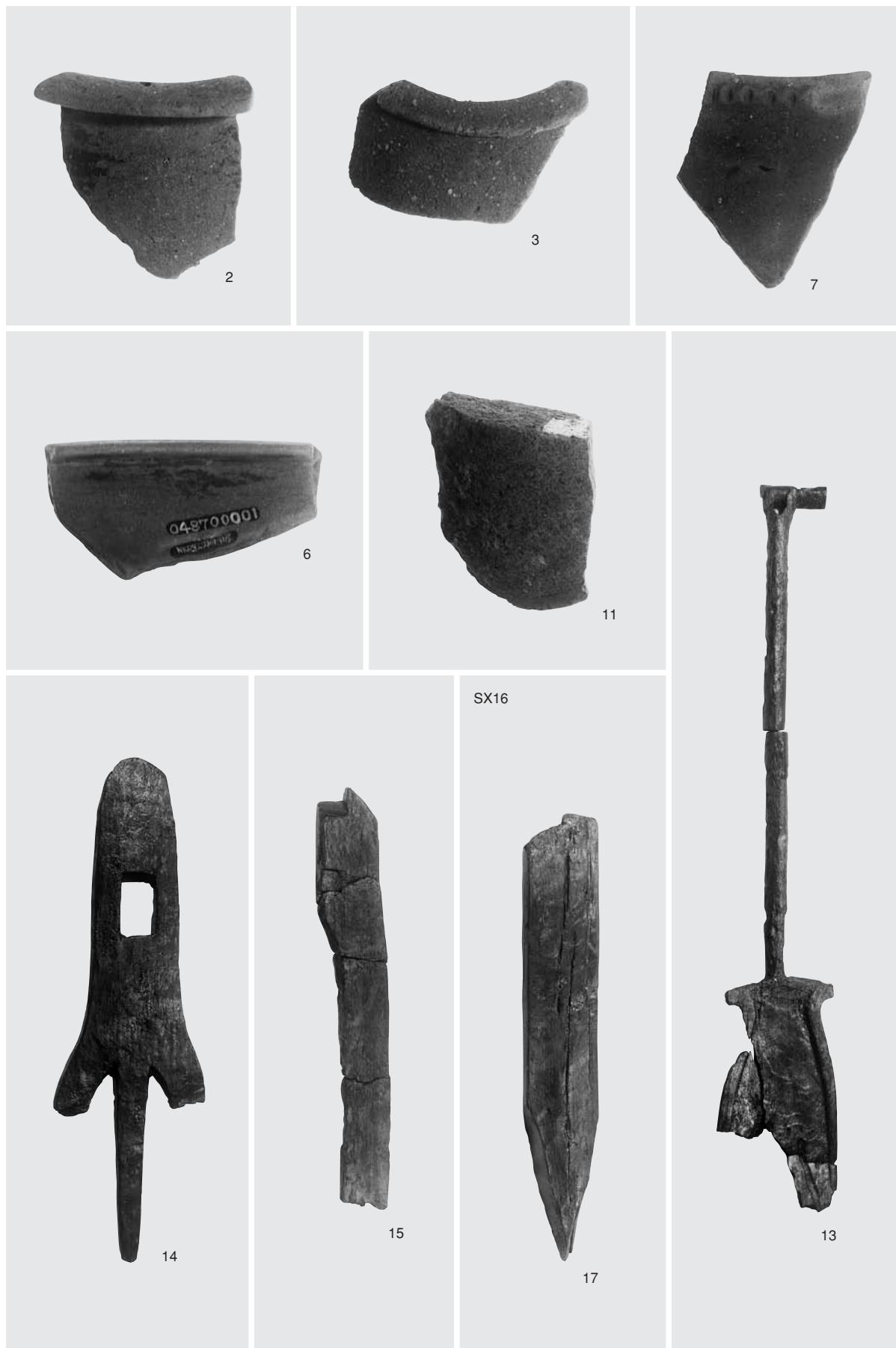
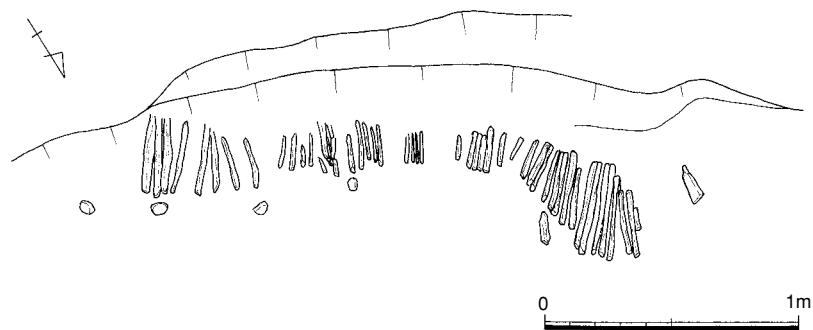


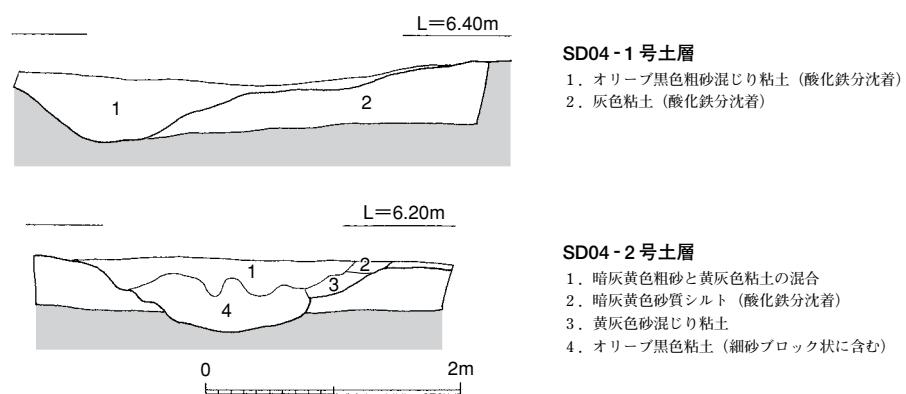
写真14 各遺構出土遺物



第10図 SD01内SX08出土状況 (1/30)



写真15 SD01西壁中で検出したSX08



第11図 SD04土層 (1/60)

か並行叩き後タテナデ。胎土は精良で、微粒の白色粒子・黒色粒子・金雲母粒子を含む。焼成は良好、色調は鈍い黄橙色を呈す。5・6は1区上層。いずれも高坏の一部で、5は鋤先口縁1/6片で、口径は内面で17.6cmを測る。表面は摩滅し調整は不明。口縁内面に丹塗り痕がかすかに残る。胎土は精良で、微粒の白色粒子・黒色粒子・金雲母粒子を多く含む。色調は鈍い黄橙色を呈す。6は脚部1/6片。復元脚径16.8cmを測る。調整はナデで、内外面に丹塗り痕が残る。胎土は精良で、微粒の白色粒子・黒色粒子・金雲母粒子を含む。焼成は良好で、色調は鈍い黄橙色を呈す。7・8は鉢。7は1/7片。口縁が内傾する形態で、端部は平坦を呈す。復元口径は16.0cmを測る。調整は丁寧なナデ。胎土は精良で、微粒の白色・黒色粒子を多く含む。焼成は良好。色調は外面灰黄褐色を呈す。8は1/10片。口縁は直立する形態で、復元口径は20.6cmを測る。調整は外面ハケメ後ナデ消し。内面はナデであるが、表面は所々剥落する。胎土は3mm大の石英粒子を多く含む。焼成は良好、色調は鈍い黄橙色を呈す。9・10は突帶文土器の甕口縁部片。9は1区北壁上層出土。1/7片で復元口径16.6cmを測る。内傾する口縁部は丸みを持ち、調整はナデ。胎土は精良、微粒子の金雲母、白色粒子を多く含む。焼成は良好。色調は灰色を呈す。10は1区底出土。1/8片で復元口径14cmを測る。口縁直下に刻み目突帶が付く。突帶は棒状工具による。胎土は精良で、1mm内の白色粒子、微粒の黒色砂と金雲母を多く含む。焼成は良好、色調は黄灰色を呈す。

13は2区下層出土の一木造りの鋤である。刃部と握部を一部欠くがほぼ全形が残る。法量は全長96.2cm、刃部長36.2cm、刃部幅16.5cm、厚み2.5cm、柄部径2.9×3.2cmを測る。表面は部分的に傷みがあるが、削り仕上げで丁寧な加工である。刃部は両側が一段高い縁をなすように中央を削り抜いて作り出している。またその肩部には踏み込むための張り出しの突起を持つ。柄部は刃部から8度の角度で付き、その柄先端部は二又に分かれたT字形を呈す握部が付くが、その接合角度は22度下方の角度を持つ。中期末～後期前半迄のもの。14は1区下層出土の三叉鋤。残りは悪く歯はほとんど欠き、残存長54.6cm、幅17.2cm、最大厚2.2cmを測る。中央に2×3cmの長方形の柄壺孔がある。柄との着装角度は40度を持つ。表面はケズリ仕上げであるが、全体に傷みは激しい。中期末頃のもの。15は1区底面出土。二又鋤の刃部片と思われ、残存長35.4cm、残存幅5.5cm、最大厚2.1cmを測る。上端には方形の柄壺孔の一部が残る。表面は削り仕上げである。16は1区下層出土。下が広がる方形の板状の加工材で、残存長21.7cm、最大幅6.3cm、最大厚2.2cmを測る。下側は斜めに削り込む。表面は磨滅するが削り仕上げである。樹種の同定はしていないが、いずれもアカガシ亜属と思われ、木取りは柾目である。他に図示していないが、杭材が2点（長さ約36.7cm、99.5cm）と、板材が1点（長さ38.5cm）出土している。

11は北西壁底面出土。磨製石斧の刃部片で、左側面に敲打痕が残り、敲石に転用したものと思われる。表面は研磨仕上げであるが欠損が著しい。残存長さ6.9cm、幅5.1cm、厚み4.4cmを測る。色調は灰色を呈し、石材は火成岩と思われる。12はI区遺構面出土の黒曜石剥片。自然面が残る。縦長3.6cm、横長2.8cm、最大厚1.4cmを測る。石材は黒曜石であるが、質は良くなく、夾雜物を含む。

SD04（第11図、写真7・16・17）

I・II調査区をS字状に蛇行して流れる溝である。II区では西側に土堤状の高まり（畔3）を持つ。確認規模は長さ30m以上、幅3m程であるが、II区北壁では5m程を測る。深さは浅く、0.5m程である。埋土は黄白色粗砂や細砂が上層に堆積し下層はオリーブ黒色粘土が主体となる。木の小枝や流木などが少量出土しているが、土器の出土は少なく、弥生土器の細片がごく少量であり、図化できるものは無かった。図示していないが、杭が2点（長さ74.7、88.4cm、断面は3.1cm、6.0cm）、出土している。断面が丸い、芯持ち材である。

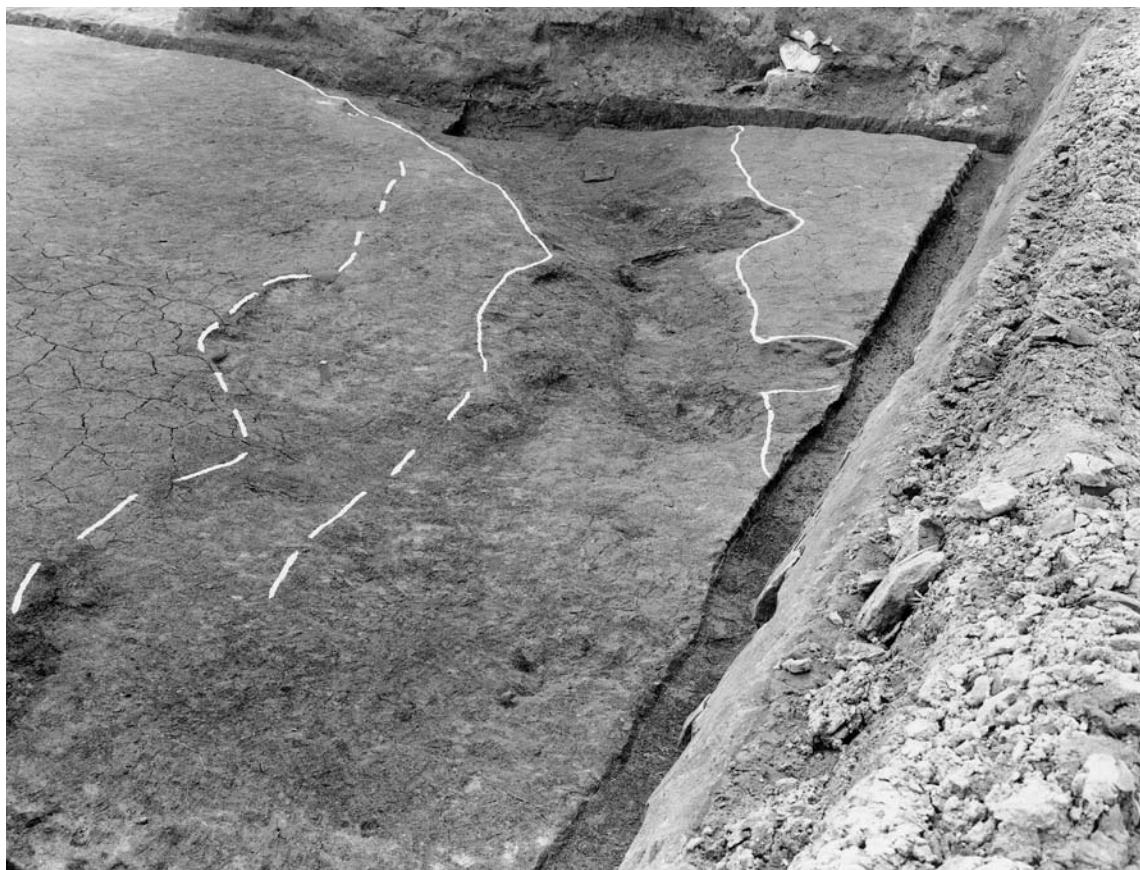


写真16 I区SD04検出状況（南東から）



写真17 II区SD04検出状況（南東から）

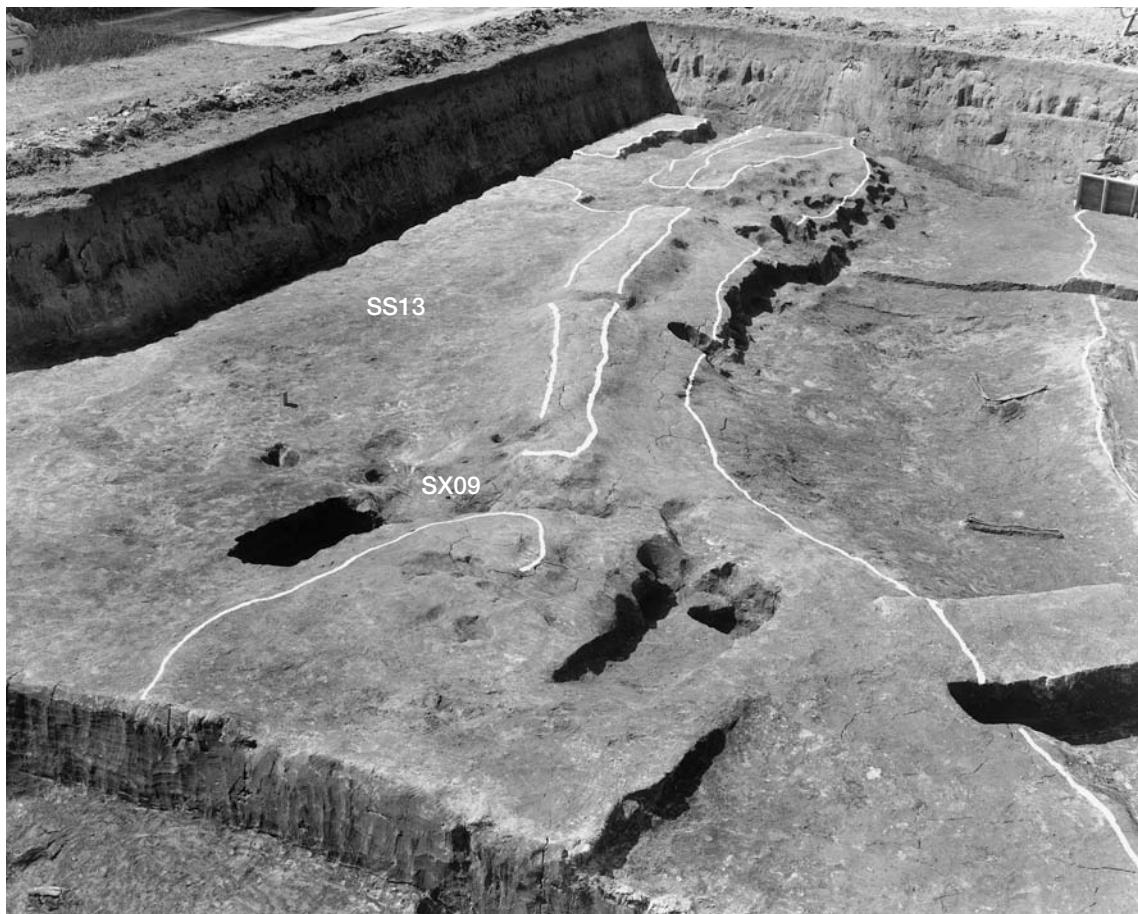
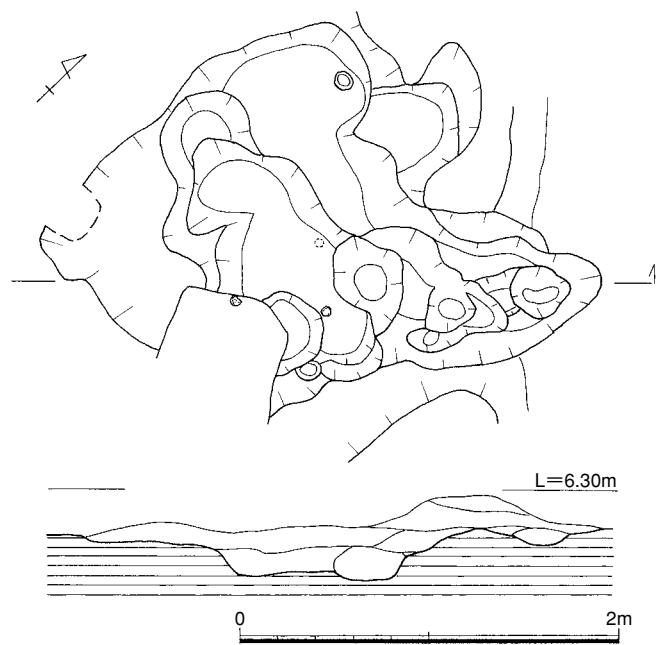


写真18 II区水田面SS13検出状況



第12図 水口SX09 (1/40)



写真19 水口SX09の状況

② 水田遺構 (SS)

SD01の両側に土堤状の畔を持ち、またその外側に洪水砂が薄く堆積し、足跡などの窪みが多数確認されたので、水田遺構と認識した。溝東側をSS02、西側をSS03とした。

SS02

I区SD01東側に広がるもので、SD01東側土堤から分岐する畔（畔3）があるが、洪水などで畔が流されたのか、残りは余り良くなく、水田区画などは不明。出土遺物は埋土から弥生土器の細片が1点出土している。

SS03

SD01の西側で検出したものである。水田の中央部には鍵形に曲る、耕土を貼り付けたような低い畔（幅0.5m、高さ3cm程）がある。また畔2の南端には水口あり、そこから北側に畔2に沿って水の流れが確認されている。

SS13（第12図、写真18）

II区SD04畔2北側から分岐する畔3の西側で検出した水田面で、畔3のII区部分で2か所水口が検出された。北側の水口は北側に延びる浅い水の流れがある。水田を区画する畔などは確認出来なかった。南側の水口では入口に直口するように幅0.35m間隔で杭が打ち込まれている。水を調節するための施設があったのであろうか。出土遺物は埋土から弥生土器細片が1点出土している。

③ その他の遺構 (SX)

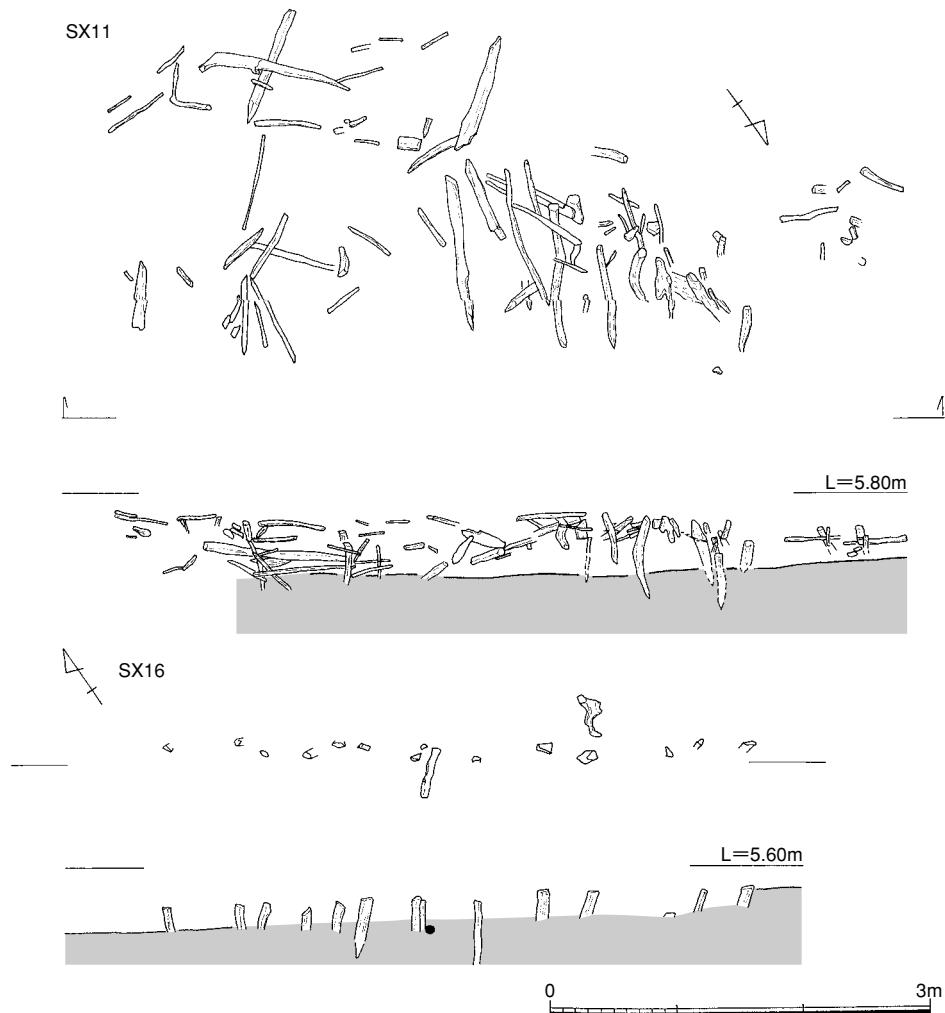
SX11 (第13図、写真20)

調査区北東側の灰色細砂や粗砂上面、幅 6 m の範囲で検出した。長さ 1 ~ 1.2m 程の粗砂中に打ち込まれた杭材とそれに横方向に直交する小木がある。土堤に打ち込まれた護岸杭列の基礎の可能性があるが、打ち込まれた面はこの遺構面より上であり、後世のものである。杭材は丸材か角材で、長さ 87.5 ~ 97.0 cm を測る。

SX16 (第13図、写真21)

II 区東壁際粗砂層面で検出した杭列である。長さ 4.5m の範囲で割材・板材が一列に並ぶ。間隔は 0.2 ~ 0.6m で、打ち込まれている深さは完掘していないので不明である。盛土が流されてしまった畔の両側に打ち込まれた杭列の可能性がある。SX11・16 はほぼ一列に連続しており、遺構として関係があるのかも知れない。

出土遺物 (第14図、写真14) 17 は矢板である。残存長 49.5 cm、最大幅 9.1 cm、最大厚 3.4 cm を測る。直径 9 cm 程の芯持ち材の両側を粗割りし、その表面に削り加工を加えた板材の一端を両側面から削って尖らせている。



第13図 SX11・16 (1/60)



写真20 SX11検出状況（北から）

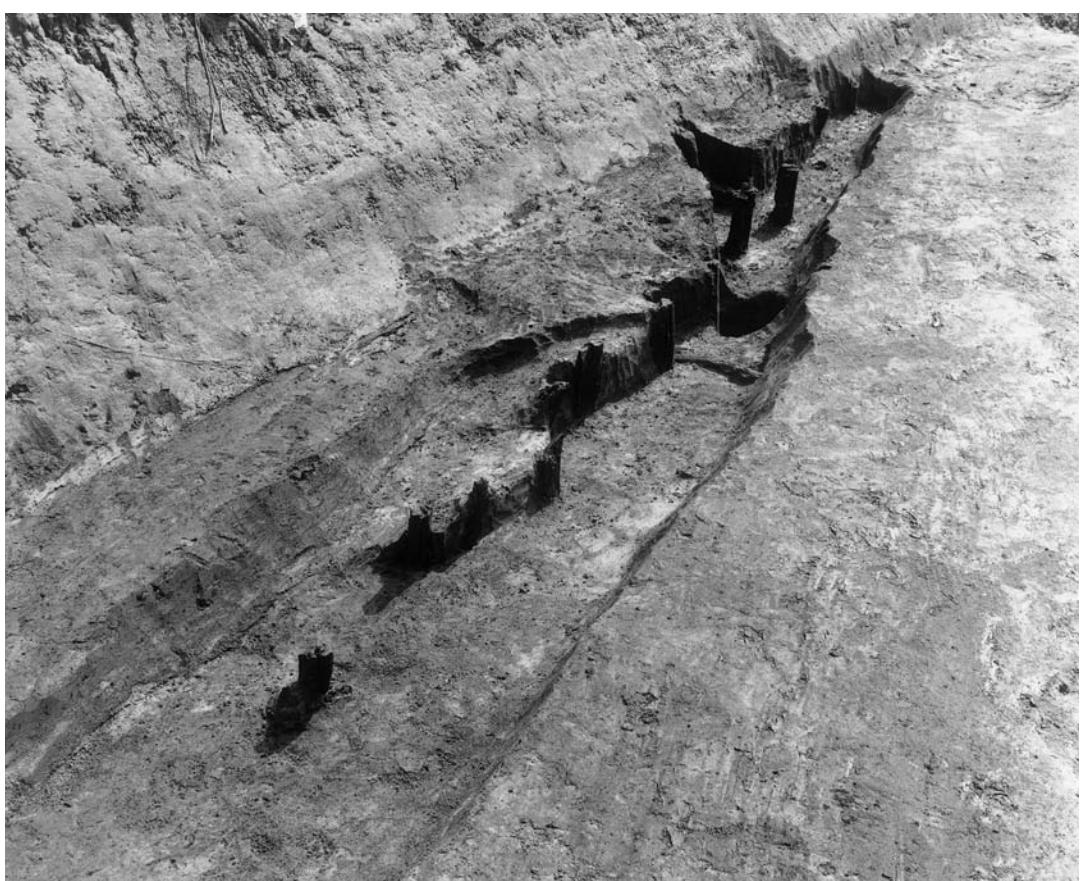


写真21 SX16検出状況（北から）



写真22 II区北壁段落ち部土層状況



写真23 II区北壁東側土層の状況

2) 第2面の調査 (第6図、写真24)

I区で部分的に調査区を基盤面まで下げる下層の遺構確認を行った。検出した遺構は溝2条と段落ち谷部である。

① 溝状遺構 (SD)

SD05 (写真25)

I区南西隅で検出した小溝で、直線的にSD01迄延びる。確認長10m、幅0.5m、深さ0.2m前後を測る。埋土は黒色粘土で、溝断面は逆台形を呈す。出土遺物は無かった。

SD07 (写真27)

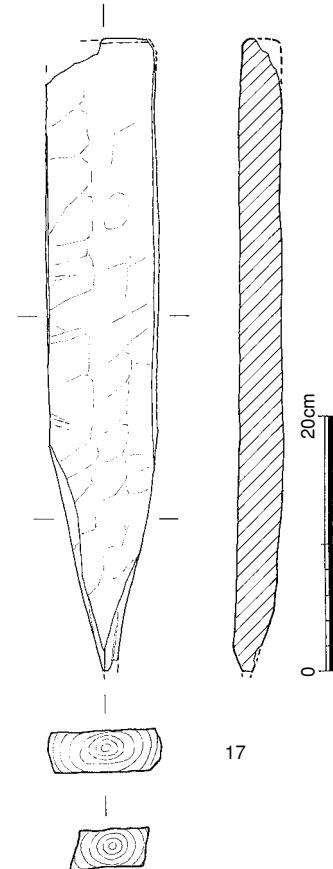
SD01の完掘後検出した溝で、SD01から北東方向に延び、段落ちに続くと思われるものである。黒色粘土を主体とした埋土で、確認長は7m程、最大幅1.5m、最大深さ1m程である。西端から4m程の所で西から延びるSD12が合流し、その合流部に堰と思われるSX14、更に1.3m程段落ち側にSX15とした堰と思われる杭と横木を組み合わせた施設がある。いずれも規模としては大きくなない。SD07は



写真24 I区第2面目段落ちの状況



写真25 SD05（西から）



第14図 SX16出土矢板（1/6）

SD01の古期段階かそれ以前のものである。

出土遺物は杭材や流木の他に、土器細片が2点出土している。図化出来たものはなかった。杭材は長さ36.5cm、87.5cm、直径5.1cm、6cmの丸い芯持ち材である。

② 堀状遺構 (SX)

SX14・15 (第15図、写真26・27)

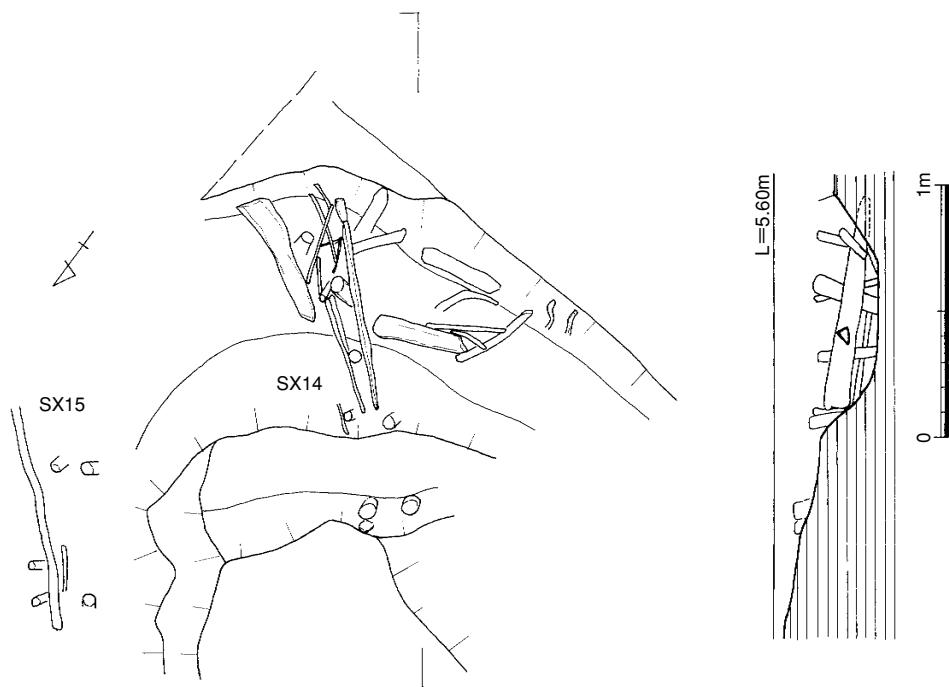
SD07内で検出したもので、1.3m間隔で並行して確認された。SX14は直径5～7cmの丸杭を溝の上



写真26 2面検出のSD07検出状況



写真27 SD07検出状況（南から）



第15図 墓SX14 (1/30)

端から直交するように15~30cm間隔で打ち込み、溝底には板材や枝を打ち払った細い丸木材などを横木として使用している。SX15はSD07と段落ちとの合流部で検出したもので、完掘していないので全容は不明である。長さ1m程の横木と縦杭からなる。流木が周辺から出土している。

③ 谷部

I区の基盤面掘下げで検出したもの。SD01東側で段落ちするが、時間がなく一部掘下げたのみで完掘はしていないので、深さなど詳細は不明。谷部はII区SD04西側迄延びる。第3次調査で検出した、旧河川の流れの方向の延長上にある。出土遺物はなかった。

3 まとめ (第16図)

今回の調査の簡単なまとめを行う。検出した主な遺構は水田と溝、段落ち谷部であるが。水田は出土遺物がなく、時期も決めがたい。しかし、水田に伴う溝SD01の時期が、底面から下層出土の農耕具が弥生中期末から後期前半頃のものであり、数少ない土器なども新しいもので、後期前半にかかるものもあることから、中期末以降の時期と考える。水田はその溝の第2期の流れに伴うものであり、後期前半より新しい時期のものであろう。谷部は南東側で調査した第3次調査に続くものと予想する。

調査は年度末という時間の制約から、基盤面で検出した遺構について十分な調査が出来なかった。本調査区では、本来3面程の遺構面が存在したと思われるが、今後の周辺調査の参考になれば幸いである。



第16図 那珂君休遺跡群遺構配置図 (1/4,000)

報告書抄録

ふりがな	なかくんりゅう							
書名	那珂君休遺跡Ⅷ							
副書名	那珂君休遺跡群第9次調査報告							
卷次	Ⅷ							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	873							
編著者名	山崎龍雄							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	西暦2006年10月13日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
なかくんりゅうい せきぐんだいくじ ちようさ 那珂君休遺跡 群第9次調査	ふくおかしはかたくなか よんちょうめにひゃくよ んじゅうばんち 福岡市博多区那珂 4丁目240番地	市町村 40132	遺跡番号 0128	33° 34' 16"	130° 26' 43"	20050210 ～20050331	700	共同住宅 建 設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
那珂君休遺跡 群第9次調査	水田	弥生時代	弥生時代一溝4条十水田3枚十谷部		弥生時代一弥生土器十 木製品			
要約	板付遺跡の北側の沖積地上に立地する遺跡である。過去の調査では、弥生時代から近世かけての、水田を中心とする遺構が検出されている。今回の調査でも弥生時代と思われる溝や、水田跡を検出した。ただ小面積の調査の為、水田規模については確認出来なかった。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第873集

那珂君休遺跡Ⅷ

—那珂君休遺跡群第9次調査報告—

2006(平成18)年10月13日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 (有)大福印刷所
福岡市城南区荒江1丁目24番10号